鈴木光司

現在(いま)を生きよう

現在（いま）を生きよう

鈴木光司

実業之日本社

著者略歴

鈴木光司（すずき　こうじ）

1957年浜松市生まれ。慶應義塾大学仏文科卒。
『楽園』（第２回ファンタジーノベル大賞優秀賞）、『リング』、『らせん』（第17回吉川英治文学賞新人賞）、『ループ』、『バースデイ』などのベストセラー小説を生みながら２人の娘の子育てもする、文壇最強の子育てパパ。これまでにない新しい父親像を実践・提唱し、TV・ラジオや雑誌などでもその普及に力を入れている。
また、厚生省の「少子化への対応を促進する国民会議」メンバー、文部省の「中央教育審議会」の専門委員としても積極的に意見する、頼もしいパパでもある。
趣味：格闘技、ヨット、ピアノなど多彩にして本格派。

現在（いま）を生（い）きよう

2000年１月18日　初版第１刷発行

著　者　鈴　木　光　司
発行者　増　田　義　和

発行所　株式会社　実業之日本社

〒104-8233　東京都中央区銀座1—3—9
電話03（3562）4041（編集部）
03（3535）4441（販売部）
振替00110-6-326
関西支局〒530-0057　大阪市北区曽根崎2—12—7
梅田第一ビル　電話06（6312）1573
印刷　㈱東京研文社　製本所　㈱石毛製本所

©2000 Kōji SUZUKI ISBN4-408-10345-4

落丁・乱丁の場合はお取り換えいたします。　Printed in Japan

¥1300—

現在（いま）を生きよう

鈴木光司

◎まえがき

新しい世界の君たちへ

テレビ等で様々な事件や事故、災害が報道されるたび、ことさらに終末思想が強調されることが多い。事件の報道後、「世も末だ」という言葉で締めくくれば、子供たちは、世界は徐々に悪い方向に向かっていると、疑念を抱いてしまうに違いない。

大人たちは「昔はよかった」とよく口にする。「古きよき日本」という言葉もしばしば聞かされる。そのたびに、一体いつの時代がよかったというのだろうと、首を傾げたくなってしまう。理不尽な身分制度があった時代がよかったのか、それとも国を開いた後に戦争へと突き進んでいった時代がよかったのだろうかと。

遠い過去を「よかった」といい、現代を「世も末だ」という風潮から生まれるのは、その先にある未来に対する漠然とした不安感である。未来に待ち構える不安を意味もなく煽れば、子供たちは将来に対して何の希望も持てなくなる。しらけて、生きるエ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

ネルギーを失ってしまう。

未来をよりよくする担い手は、新しい世界の若者たちに他ならない。そのためにこそ若い世代にエールを送ろうと思う。

時代というものは常に移り変わり、本当はいつの時代がよかったのかなどと、明瞭にいえるものではない。しかし、信じることはできる。過去よりも現在のほうがいい時代であり、その延長線上で未来はもっとよくなると信じてほしい。そうして、信じた通りに変えていくのが、若いエネルギーである。

ふたりの娘たちの子育てに深く関わっていくうちに、未来に対する思いを強く抱くようになった。子供たちが将来生きることになる世界への興味がかきたてられ、若い世代へのメッセージが胸に溢れてくる。

若い世代の君たちには、世間の目という呪縛に囚われず、のびのびと生きてほしいと思う。固定観念に縛られている者の目には無駄なことと見えても、熱中する価値のあることはたくさんある。偏差値アップに最大の価値を認めている者の目に、勉強の合間にするギターの練習は無駄と映るだろう。しかし、音楽を通して数学的な調和を読み取り、勉強への理解が深まるという展開もなきにしもあらず。いけないのは、他人の目に縛られて、自分の行動を規制してしまうことだ。そこからはどんな価値も生

じてこない。その点をうまく区別して見極(みきわ)め、得(え)もいわれぬ瞬間を多くゲットしていけば、君の人生は輝きを増す。

伝えるべきメッセージは強く大きいと自負している。その言葉が、若い世代に届くことを願う。

目次

まえがき　2

第一章
世の中は競争社会ではない　13
囚人のジレンマにみる協力社会　14
誤って伝わった「進化論」　21

第二章
常に少数派であれ　25
実社会でのし上がれるのは多数派ではない　26
時間のムダ使いはエネルギーの浪費だ　30
自分に付加価値をつける　34

本当の自由には責任がつきものだ　37

第三章
タバコを吸うのはカッコ悪い　43
自信があれば小道具はいらない　44
愛煙家は認識を持て　48
プロはタバコを吸わない　52

第四章
スマートに生きよう　55
くだらないミエを捨てよ　56
父性の欠如が伝承を阻む　61
年を重ねるごとに美しく　65

第五章
なぜ、高校生はオートバイに乗れないのか 73
法律では可。校則は不可 74
免許は若いうちに取ろう 80
追試と教習所の狭間で 84
第六章
受験勉強はいいものだ 89
楽しく過ぎた高校三年間 90
ロックンローラー志望から作家へ 94
充実していた浪人生活 98
早計な進路決定は偏った人間を作る 104
努力と才能とセンスの違い 108

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

ムダがいつかは生きてくる 114

第七章
お金で幸福は買えないぞ 119
貧乏もまた楽し 120
心が貧しくては幸福になれない 125
心の満足は金で買えない 132

第八章
いい男は挫折を乗り越えるのだ 135
「ひょうたん」から「こま」へ 136
パートナーの支えは最大のエネルギー源 142
恥をかいてもアタックすべき 146

第九章
恋愛しよう 151
コミュニケーションをとれる相手を探せ 152
今、男の子が危ない 159
ときめきから強い絆へ 164
第十章
未来は明るい 171
今は悪い時代か？ 172
過去は地獄だった 176
信じることから未来は拓ける 182

カバーデザイン　野口義治
フォト　野澤雅史
本文イラスト　なかざわ信雄

第一章

世の中は競争社会ではない

囚人のジレンマにみる協力社会

ぼくがこれからの若い世代の人たちに、一番最初に理解してもらいたいのは、「世の中は決して競争社会ではない」ということだ。

とかく親世代は子供世代に向かって、「社会に出たら競争だ」「人に負けてはいけない」と口にする。もし本当にそう考えているなら、親世代は世の中をほとんど知らないといっても過言ではない。

ここでわかりやすくするために、具体的な例をあげてみよう。

『ゲームの理論入門』（講談社・ブルーバックス）という本の中に〝囚人のジレンマ〟というのがある。ある犯罪を共同で犯したという嫌疑を受けた二人の人間が警察に逮捕され、それぞれ独房に入れられている。容疑者AとBには、自白か黙秘かどちらかの選択が迫られる。片方が自白して相手を売った場合、自白した人間は釈放されるが相手は二十年の刑に服する。両方

容疑者A	
自白	
黙秘	

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com